

グリーンシティ・フライブルク「環境首都」の真意を問う



ドイツ南西、オーバーライン地方南部の都市フライブルクには、様々な名声があります。「環境首都」として名が通っているのはもちろん、連邦内でも特に日射量の多い「太陽ベルト」に位置し、ドイツのトスカーナと呼ばれています。ここでは環境保護分野において確かに多くの成果が上げられています。しかし「環境首都」というのは実際のところ、世界全体で起きている環境破壊のプロセスが、フライブルクにおいてはほんの少しだけゆっくり進行し

ているということに他なりません。

おおよそ 21 万 5 千人の人口（うち約 3 万人が学生）を抱えるフライブルクは、環境保護に関する国内の賞を度々受賞してきました。1992 年には環境首都として、2004 年には持続可能性のある自治体として表彰されていますし、自治体の太陽光発電量を競うコンテスト「ゾーラーブundesリーガ」では、10 万人以上の人口を持つ都市の部門で幾度も 1 位の座を獲得しています。2010 年には、人口 10 万人以上の部門でフランクフルトとハイデルベルクを抑え、「気候保護のドイツ連邦首都」の座に輝いています。

これらの進歩の原点は数十年前にあります。1962 年までフライブルクは、むしろまどろみの中にある、カトリックの司教を抱えた保守的な学生の街でした。国境近くに位置し、フランスとの戦争がたびたび起こっていたため、環境破壊をもたらすような産業がフライブルクおよび南バーデン地方にやってくることはそれまでありませんでした。

1975 年前後、SPD（ドイツ社会民主党）の市長を抱いていたとはいえ、政治的には保守傾向の強いこの街で環境に関わる非常に大きな抗争がありました。フライブルクからさほど離れていないマルコルスハイム（仏）における化学鉛工場の建設計画を始め、ヴィール（独）、カイザーアウグスト（スイス）、ゲアストハイム（仏）の 3 カ所での原子力発電所建設計画が、予定地を占領しての反対運動により中止に追い込まれました。1976 年にはカイザーシュトゥール近郊のザスバッハで、環境保護団体 BUND（ドイツ環境自然保護連盟）と市民団体による大規模な再生可能エネルギーの博覧会「ゾネンターゲ」が世界で初めて開かれました。



原子力発電に対する根強い「反対」と、持続性のあるエネルギーへの早くからの「賛成」運動を通し、環境保護活動家の間で地域ネットワークが生まれました。エコ・インスティテュート、BUND、緑の党、また今日フライブルクにある環境およびエネルギーに関する企業などは、このオーバーラインで起きた初めての大規模な環境抗争が原点となったといえるでしょう。

政治に対し批判的で行動的な人々は、エコロジカルな進

歩を達成するために必要な政治運動を長年にわたって繰り返し、その結果はフライブルクの選挙結果にも反映されています。

チェルノブイリ原発事故の後の1986年、近郊の街フェッセンハイム（仏）の原発の驚異にさらされていることも相まって、「気候変動防止を目的としたエネルギー供給コンセプト」がフライブルク市で可決されました。この採決は、ドイツの都市の中でも早い部類で、エネルギー、水道、資源の消費が抑制されるべきであること、再生可能エネルギーの利用、再生可能エネルギー技術の導入が促進されるべきであることが盛り込まれました。今日ではフライブルク市は「気候変動防止」のために取り組んでいます。



この街の重要な看板プロジェクトとしては、環境に配慮して計画された新居住地区ヴォーバンがあります。ヴォーバン地区は、駐在していたフランス軍の撤退後、省エネルギーと、限られた土地面積の有効活用をコンセプトに築かれたものです。また市の公園ゼーパークにはBUNDが運営する環境教育施設エコステーションがあり、そこで行われる様々な活動はドイツ中で高い評価を得ています。

上記で挙げた以外のものも含め、素晴らしいフライブルクの成果の陰には、それを支えてきた市民の努力があります。例えば太陽光を利用した建築で知られる建設家ロルフ・ディッシュ氏（Rolf Disch）、太陽エネルギー分野での先駆者ゲオルグ・サルバモザー氏（Georg Salvamoser）、エコステーションのハイデ・ベルクマン氏（Heide Bergmann）、またフライブルクの市民、政治・行政に関わる人々、環境保護団体における活動家、そしてメディアの場で「人間と自然、環境、持続可能性」について他のどの街よりも強い関心を持って情報発信をしてきた人々を忘れてはいけません。



十数年におよぶ市民による環境保護活動は、エコロジーの意味だけでなく経済的な成果ももたらしました。主立った太陽エネルギーの研究機関はフライブルクにありますし、数々の中規模・小規模企業が多様な形で再生可能エネルギーの使用促進に力を注いでいます。

また近距離公共交通の分野では、数十年前に自転車を使っのデモやその他の市民活動が行われ、価格の安い「環境定期券」が導入されました。今日ではドイツのどの地域でも当たり前のものになりましたが、フライブルク市だけでなく、エメンディンゲン近郊、ブライスガウから黒い森高地を網羅した近距離交通定期券「レギオカルテ」は、当時としては先駆的なものでした。

フライブルク市と近隣地域はその他にも、環境に配慮した交通システム促進に多数の投資をしてきました。エコロジカルな交通手段を利用する人の割合は、車を利用する人よりも非常に高いものになりました。市は気候変動防止策も積極的に推し進めていて、2030年までに大気に悪影響を与えるガスの排出を40%下げる予定です。

電気供給の面ではどうでしょうか。環境問題への関心と、原子力発電所によって作られた電気への抵抗感は、電力供給会社バーデノーヴァの企業ポリシーにも浸透しています。2008年の年始よりバーデノーヴァ社の個人顧客は、州の電力会社EnBWが原子力により発電した電気ではなく、25%は再生可能エ

エネルギー、75%は熱併給発電（コ・ジェネレーション）によって作られた電気を受け取っています。バーデノーヴァが供給する電力の約半分は個人顧客が買い取っています。原子力発電所から供給される電力量の割合は、全ての電力会社を併せ 22%までに削減され、結果として今日では、原子力発電による電気をバーデノーヴァ社から買い付けているのは企業顧客が主となりました。これも数年後には、原子力によらない電気によって全て代替される予定です。

オーバーライン地方での環境保護運動の当初からフライブルクには、環境に関する実に様々な機関が集まっています。エコ・インスティテュートはフライブルクに本部を設置していますし、ICLEI（持続可能性を目指す自治体協議会）はヨーロッパ事務局を、そしてフラウンホーファー研究所のソーラーエネルギーシステム部門、国際ソーラーエネルギー学会もフライブルクに席を置いています。

しかし環境首都においても全てがエコロジカルという訳ではありません。

1990年頃、この地域で、またドイツ全体で、大きな利益をもたらす大規模ゴミ焼却装置に賛同する人々が、生分解性システムを利用したゴミ処理施設に反対して強力なロビー活動を展開しました。その際フライブルクでは、大規模ゴミ焼却装置推進派の方が手腕に優れていて、費用が安くエコロジカルな方法を追求する人たちよりも強い影響力を発揮しました。

また、オーバーライン地域における大きな環境テーマのひとつに、増加する一方である住宅地需要の問題があります。ドイツの他の地域で人口が減る一方であるのに対し、フライブルク周辺では、「成長への夢」や「発展への望み」、そして地域そのものが、途切れることなく拡大しています。環境首都であり、ドイツのトスカーナであり、またこの国の太陽ベルトに位置するこの街では無理のないことかもしれません。エコロジカルな地域という名声は皮肉にも住宅地の需要を招き、オーバーライン地方における宅地開発による環境破壊や景観の悪化の起因となっています。



アウトバーン（高速道路）B31 の拡張工事に関してフライブルク市は、反対する市民の抗議活動に対し多大な警察官を動員して強行しました。しかし道路の拡充は交通量の増加の要因となります。実際市と周辺地域は、フライブルクを通過する B31 路線と、ヨーロッパ南北高速道路で通過交通が増え続けていることに悩まされています。

巨大な新しい太陽光発電装置がそれに相応しい賞賛を受ける一方、フライブルクのゴミも焼却している焼却施設「TREA ブライスガウ」で、50メガワットにおよぶ廃熱が浪費されていることは議題に上りません。TREA では 2004 年から日々途切れることなく、12 万リットルの石油に相当する膨大な熱が、使用されることなく大気中に放出されているのです。

再生可能エネルギーの利用もまだまだ微々たるものです。フライブルク市は、2010 年までに使用電気の 10%を再生可能エネルギーで賄い、同時に電気消費量を 10%削減する目標を立てていましたが、全く達成できませんでした。再生可能エネルギーの利用率は今までのところわずか 3,7%にとどまり、エネル

ギー消費量も減るどころか3%増加してしまいました。またバーデン・ヴュッテレンベルク州のエネルギー政策が、大規模電力会社 EnBW の独占を中心としたものである限り、再生可能エネルギーを増やしたいというフライブルク市の願いも意味を持ちません。フライブルクにある州支部会は、持続可能的で長期にわたって使える風力発電の建設が、この街で増加することを阻止しています。



「オーガニックバレー」をうたいながら、遺伝子組み換え作物も推進されているオーバーライン地域では、遺伝子組み換え技術の危険性について好んで議論する人はいません。遺伝子組み換え技術によって利益を得るフライブルク大学だけに限った話ではなく、環境保護において、エコツウリズムにおいて、そして遺伝子組み換え作物においても利益のみが優先されているのです。すなわち今日のフライブルクでは、エコロジー、気候変動防止、環境といった問題は、「お金が稼げる」ことによって初めて重要なテーマとなります。風向きのため直に影響を受けるアルザス地方の重工業の公害よりも、流行の自己啓発コースや、遠く離れた政治の場で話題になる環境問題の方があたかも重要であるように見えるのです。

環境負荷の高い企業における「イメージ戦略のための環境保護活動」も、オーバーライン地域ではかなり進んでいます。原子力発電を主力とする電力独占企業 EnBW、EDF ですら、「ライン川に沿って」という、他企業の模範となるような「環境にやさしい提携」を樹立しているのです。

「成長の限界」という、人類の将来に対する核心的な質問が、フライブルクで好んで投げかけられることもありません。

エコロジカルフットプリントに関していえば、この街の評価の中では見落とされがちです。エコロジカルフットプリントとは、ある人間の生活様式を長い間将来持続させるために必要な地球の面積を表したものです。フライブルクで消費あるいは浪費される多くの品物や資源は、遠く離れた土地で採掘されたり生産されたりしています。それらはエコロジカル首都の環境ではなく、遠い国の環境を害するものですが、フライブルク市のエコ決算に対する客観的評価の中で忘れられてはなりません。

持続可能性のある自治体、環境首都フライブルクというのは、エコロジカルと持続可能性への進歩という意味ではありません。環境首都フライブルクが意味するものは、世界的な環境破壊のプロセスが、ここでは努力によってその進行速度を緩められたということです。資源やエネルギーの消費、発電時に発生する使用済み核燃料や二酸化炭素などを鑑みれば、フライブルク市民は見たところ持続可能的、未来永続的ではありませんし、「世界の他の街」を代表できるものでもありません。またフライブルク内においても、貧富の差の解消といった社会的公平さを抜きにして、持続可能性と未来永続性が達成されることはありえないのです。



市民また環境保護団体、環境問題に関する企業そしてフライブルク市政は、環境と持続可能性において多くのことを成し遂げましたし、そのことに誇りを持つのも当然のことでしょう。実際フライブルクが他の自治体よりも、いくつかの重要な分野で環境に配慮しているのは間違いありません。この街はあ

るべき道の初めの一步を踏み出しており、他の街はフライブルクから多くのことを学べるでしょう。

しかし自信は時としてある種の遅滞や行動のゆるみ、そしてほぼ全ての目標に到達したという間違っ
た思い込みを招くものです。事実、環境保護活動を進展、加速させる重要な圧力は薄まってしまっ
ています。

この街で暮らしているからといって、日々あぐらをかいて暮らせる理由などありません。真の意味で
の持続可能性と本当の未来永続性を達成するまでの道のりは、「グリーンシティ」フライブルクにおい
てもまだまだ程遠いものなのです。

アクセル・マイヤー

BUND（ドイツ環境自然保護連盟）南バーデン・オーバーライン地域事務局長

TRAS（反原子力発電三カ国連盟） 副会長

原文 <http://vorort.bund.net/suedlicher-oberrhein/freiburg-oekohauptstadt-umwelthauptstadt.html>

日本語訳 熊崎実佳

お気づきの点がありましたらご連絡いただければ幸いです kumazaki.mika@googlemail.com